

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	発達支援ルームそらまめ		
○保護者評価実施期間	2025年 9月 16日		～ 2025年 12月 12日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	69	(回答者数) 56
○従業者評価実施期間	2025年 9月 16日		～ 2025年 12月 12日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 1月 30日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	一人ひとりの「やってみよう」「挑戦したい」「一緒に遊びたい」といった主体的な気持ちを尊重し、遊びや日常活動を通じて、子ども同士の関わりや社会性の育ちを丁寧支援している。 個々の特性や気持ちの変化を細やかに捉えながら、無理のない関わりを積み重ねることで、安心して人と関わる経験を重ねられる点が事業所の強みとなっている。	発達支援に理解のあるスタッフが常勤し、子どもの気持ちに寄り添った声かけや関わりを大切にしている。日々の関わりの中で「できた」「楽しかった」という小さな成功体験を逃さず共有し、安心して過ごせる雰囲気づくりを意識している。また、子どもが自分のペースで過ごせる時間と、他者と関わる時間のバランスを意識し、事業所を「安心して戻ってこられる居場所」として機能させている。	今後は、活動の中で得られた成功体験をより意識的に積み重ね、「自分にはできることがある」という自己肯定感や挑戦意欲の育成につなげていく。また、子ども自身が「次はこれをやってみよう」と目標を持てるよう、選択肢の提示や振り返りの機会を増やし、主体性を育む支援を行う。こうした積み重ねを通して、将来の社会参加や自立に向けた土台づくりを継続的に支援していく。
2	活動プログラムは、スタッフがチームで子どもの様子や発達段階を共有しながら立案しており、遊びや日常的な体験を通して、子どもが主体的に学びを深められるよう工夫している。 時間や空間の構成についても配慮し、活動の流れや見通しを視覚的にわかりやすく示すことで、安心して過ごせる環境づくりを行っている点が事業所の強みとなっている。	活動プログラムが固定化しないよう、日々の子どもたちの様子や興味・関心を踏まえ、内容や進め方を柔軟に調整している。活動スケジュールの提示にあたっては、見本や実物を先に示した上で説明を行い、活動内容を具体的にイメージできるよう工夫している。こうした関わりを通して、子どもたちが安心して活動に参加し、自ら関わろうとする気持ちを引き出せるよう意識している。	「そらまめ活動」については、子どもおよび保護者を対象としたアンケートを実施し、好評だった活動や今後取り入れてほしい内容を把握することで、活動の質向上につなげている。今後は、アンケート結果を踏まえつつ、一人ひとりの特性や発達段階に応じて「自分で考え、選択し、行動する力」を育める支援をより意識的に行う。スタッフが子どもと一緒に考える関わりを重ねながら、成功体験を積み重ね、できることを少しずつ広げていけるよう支援していく。
3	定期的な面談の実施に加え、毎回の療育後に保護者との対話の機会を設け、日々の様子や変化を共有しながら共感的な支援を行っている。また、学校や関係機関と連携し、ご家族の状況やニーズに応じた情報共有を行うことで、家庭を多方面から支える支援体制を構築している点が事業所の強みとなっている。	保護者の困りごとや不安を丁寧に受け止められるよう、必要に応じて個別に時間を確保し、電話やメールなど状況に応じた柔軟な方法で相談対応を行っている。日常的なやり取りを通して、保護者が安心して思いを伝えられる関係づくりを意識し、信頼関係の構築に努めている。	今後は、ご家族の要望や支援の状況に応じて、関係機関への支援内容の引き継ぎをより丁寧に行い、支援が途切れることのない連続性を確保していく。あわせて、保護者支援の質向上を目的に、職員の勉強会や研修会の内容を充実させ、専門性の向上と支援力の強化を継続的に図っていく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	そらまめでの活動内容や非常時対応訓練について、Instagramやホームページを活用した情報発信を行っているが、すべてのご家族に十分に情報が届いているとは言えない状況がある。 情報を発信しているものの、保護者が日常的に確認しやすい形になっていない点が課題となっている。	・情報発信の手段がInstagramやホームページに偏っており、利用状況に個人差がある。 ・発信内容が日々の支援の様子や取り組みの意図まで十分に伝えられていない。 ・保護者へ「見てほしい情報」が埋もれてしまい、重要な内容が伝わりにくくなっている。	・デジタル以外の手段も組み合わせた情報共有の工夫。 ・非常時対応訓練や活動の目的・ねらいを、簡潔にまとめて定期的に周知する取り組み。 ・保護者との日常的な対話の中で、情報発信の内容を補足し、理解を深める機会を増やす。 ・ご家族が必要な情報を選んで受け取れるよう、発信方法や頻度の見直しを行う。
2	集団での活動時に、スペースがやや狭く感じられるとの意見があり、活動内容や人数によっては環境面での制約が生じる場面がある。一方で、個別で落ち着いて過ごせる環境づくりとして「落ち着きルーム」を設け、気持ちの切り替えや一人時間の確保など、目的に応じた活用が進んでいる。	・現在の施設スペースには限りがあり、その中で活動内容や人数に応じた空間の使い分けを十分に行ききれていない点が課題となっている。また、屋内スペースに活動が集中しやすく、環境調整の工夫にさらなる検討の余地があると考えている。	・活動内容や参加人数に応じて、空間の使い方をより柔軟に調整する工夫。 ・地域の公園や広場など屋外の公共スペースを活用し、身体を動かす活動や集団活動を積極的に取り入れる。 ・屋内外の活動を組み合わせることで、子ども一人ひとりが過ごしやすい環境を確保し、活動の幅を広げていく。
3	活動プログラムは、スタッフがチームで子どもの様子や発達段階を共有しながら立案しているが、活動のねらいや支援の視点が十分に整理・統一されておらず、職員間で関わり方に差が生じることがある。 また、遊びや日常的な体験を通じた学びについて、子どもの成長過程や支援の積み重ねが見えにくい点が課題となっている。	・活動プログラムの目的や評価を振り返る機会が十分に確保できていない。 ・日々の支援で得られた気づきや工夫が、職員間で共有されにくい。 ・経験に基づいた支援が中心となり、記録や整理が追いついていない。	・活動プログラムのねらいや支援の視点を整理し、定期的に職員間で共有・確認する機会を設ける。 ・記録や振り返りを通して、子どもの成長や学びを可視化し、支援の積み重ねにつなげる。 ・チームとして共通理解を深め、より一貫性のある支援の提供を目指していく。